

補論 1. 縄文時代後晩期における四街道市北部遺跡群の動態

①四街道市北部の遺跡群

内黒田遺跡群とその東側に展開する鹿島川低地に至るまでの台地上には、近年調査が進んだからでもあるが、縄文時代の遺跡が広範囲に存在することが知られている。具体的には内黒田遺跡群、千代田遺跡群、物井地区遺跡群であり、その中核的位置には八木原貝塚が所在する。また縄文時代の中でも特に後期から晩期にかけての遺跡は各期に互って存在し、個別の遺跡の存続期間は短くとも、遺跡群総体で見れば全く途絶することはないと言って過言ではない。しかもある時期に多数の遺跡が並立するのではなく、それぞれの時期には中心的な遺跡が認められる。従ってこの地域はある一つの集団の領域であり、その中で移動を繰り返した結果として遺跡群が形成されたと考えられる。無論この地域の考古学的調査は現在も続行中であり、今後さらに新しい知見が加えられていくであろうが、ここで今後の叩き台として現時点で把握される遺跡群の動態をまとめてみるのも無意味ではないだろう。時期は縄文中期末以降に絞る。

②各遺跡の概観

まずそれぞれの遺跡で遺構が検出されるか、またはまとまった遺物包含層が形成されている時期を通観しておく。

池花遺跡 遺構は検出されていない。まとまりのある包含層としては、加曽利 B 3 期、安行 3a 期、荒海（新）期、弥生時代初頭、弥生時代中期前半に形成されている。ただ加曽利 B 式土器については B 3 式土器を主体とするものの、中になかなか古相を示す土器も混ざる。なお弥生時代の 2 時期については他に例が乏しい土器群であるため、編年の位置付けが難しい。

池花南遺跡 称名寺式土器、堀之内式土器が点々と検出されたが、まとまりのある包含層としてはまず加曽利 B 2（古）期に成立して大規模な展開を見せるものがある。加曽利 B 3 式土器は皆無であるが、再び曾谷期に占地されて安行 1 期へと続き、千網期、須和田期にも大規模包含層が形成されている。加曽利 B 2 期には埋甕があり、また千網期の可能性がある土坑群が検出されている。

大割遺跡 まず称名寺 1 期に包含層が形成される。これには住居跡が伴っている。この住居跡の存在する地点が最も集中度が高く遺物量も多いが、遺跡全体に称名寺式土器が数個体ずつ点在した。次に加曽利 B 2 期にも包含層が形成されるが、称名寺期の地点をほぼ踏襲していると言ってよい。

千代田遺跡群Ⅰ区 内黒田遺跡群の対岸の北寄り。加曽利 E 3 期の住居跡が検出されているが、後期には加曽利 B 1 式土器が断片的に出土しただけである。

千代田遺跡群Ⅱ区 池花遺跡、池花南遺跡の対岸に相当する。やはり加曽利 E 3 期の集落跡

が検出されている。後期以降の遺構、遺物は全く報告されていない。加曽利E期については、内黒田遺跡群でも各遺跡でEⅠ～EⅢ式土器が少量ずつ出土している。

千代田遺跡群Ⅲ区 縄文時代の遺構は検出されていない。土器は量的には多くないが、加曽利EⅣ期、加曽利BⅠ～Ⅱ期、曾谷期、安行Ⅰ期のものが出土している。

千代田遺跡群Ⅳ区 八木原貝塚と同一台地上に所在した遺跡で、一連のものと考えてよい。中期末葉から後期前葉、後期後葉の多くの遺構が確認されており、継続的な性格を持つ遺跡とすることができる。加曽利EⅣ期については住居跡Ⅱ棟と小竪穴Ⅴ基、称名寺期については住居跡Ⅱ棟と集石遺構Ⅰ基、堀之内期については住居跡Ⅰ棟が検出された。後期後葉になると一部加曽利BⅢ期から曾谷期、安行Ⅰ期の多数の小竪穴群がある。住居跡は安行Ⅰ期のものがⅡ棟、安行Ⅱ期のものがⅠ棟が検出されているが、小竪穴群はむしろ曾谷期のものが多く、曾谷期の居住空間もこの付近に存在したであろう。他の時期の遺構、遺物は稀薄で、加曽利BⅠ期の小竪穴がⅠ基確認された以外は、加曽利BⅡ式土器、安行3a式～前浦式土器が少量出土しているに過ぎない。

八木原貝塚 公園として保存されているが、これまでに一部発掘調査が行われている。公表された資料は些か不十分なものであるが、堀之内（Ⅱ式）期から曾谷期までの遺構、遺物が検出されている。

千代田遺跡群Ⅴ区 千代田Ⅳ区や八木原貝塚のある台地の北側に谷を挟んで立地した。晩期前葉を中心とした遺跡である。住居跡及び住居跡状遺構はⅣ棟が検出され、うちⅡ棟はおそらく安行3a期の所産と考えられる。また炉が検出されなかった住居跡状遺構も晩期の土器が出土したと報告されている。のこるⅠ棟の住居跡は加曽利B期のものであるが、他に堀之内Ⅰ式土器、加曽利BⅠ式土器が少量出土する。後期後葉の遺構、遺物はなく、安行Ⅱ期から再び占地されるようで、前浦期まで包含層の形成が続く。また晩期後葉浮線文土器も微量ながら出土している。

千代田遺跡群Ⅵ区・Ⅶ区 殆ど見るべき遺構、遺物がない。

御山遺跡 千代田Ⅳ区の東南東に位置する遺跡で、1984～1985年度に調査された。加曽利EⅡ～EⅣ式土器が少量出土しているが、まとまった包含層の形成は加曽利B期に開始される。出土した土器の主体は加曽利BⅠ式土器で出土地点は大きくはⅡ地点に分かれる。加曽利B期後半には衰微してしまうが、また安行Ⅰ期になって少量の土器を出土している。その後大規模な遺物包含層が形成されるのは晩期後葉の浮線文土器群の段階（後半）で、住居跡、墓墳を伴っており、荒海期まで規模を縮小することなく続く。また弥生時代中期初頭と考えられる土器も出土している。

清水遺跡・新久遺跡 御山遺跡の西側に隣接する遺跡である。清水遺跡と新久遺跡は県道を挟んで呼び分けているが実質上は同じ遺跡と考えてよい。1986年度に調査され、その整理作業

が殆ど未着手であるため詳しくは判らないが、縄文時代後期に、御山遺跡とほぼ同じ頃に隆盛を迎え、加曽利B期前半と安行1期の土器が目立つ。他に加曽利EⅢ式土器や称名寺式土器が断片的に見られた。

出口・鐘塚遺跡 千代田遺跡群の南方、内黒田遺跡群と物井地区遺跡群との中間地点に位置する。この遺跡は1986～1987年度に調査されたが、やはり整理作業が未着手である。縄文中期以前が比較的充実し、前期黒浜～興津期(特に浮島期)、中期阿玉台期などの遺物が目立つ。他の多くの遺跡と同様に加曽利EⅡ～EⅢ式土器及び加曽利B1～安行1式土器が出土しているが、加曽利B2期(前後)の遺構を検出している。加曽利B式土器以外は少量。

物井地区では他に棒山・呼戸遺跡、小屋ノ内遺跡などが調査されており、縄文時代の遺構、遺物包含層が検出されているが、現在のところそれらの内容を知るに至っていない。

③時期毎の動態

前記の各遺跡の「盛衰」を一覧したのが第11表である。遺跡群総体で見れば、縄文中期後葉以降は全く途絶がないと言ってもよい。表からも判るように、この遺跡群の中で明らかに中心的な位置を占めるのが千代田遺跡群Ⅳ区である。特に縄文中期末から後期末までかなり継続的に集落が営まれているようである。一方その周辺にある遺跡は、ある時期には遺構が残され、あるいは多量の遺物が残されるが、殆どの場合短期で遺跡の形成が終了している。また多くの遺跡ではそういった時期が複数回訪れているが、興味深いことに、特定の台地上においてある時期に遺構、遺物が集中した地点に、後の時期になって再び集中地点が形成されることが多い。その間には数十年あるいは長い場合には百年以上の時間が想定されるにせよ、この事実から集団の占地が特定の地点を意識して行われたと考えてよいのではないだろうか。この背景としては、遺構や遺物集中が反復して形成される地点が単に利便性があったというよりも、特定の集団領域の中で、その集団自体に伝世的に意識されていた地点とすることができないだろうか。また逆に、継続的に集落が営まれ続けたように見える千代田遺跡群Ⅳ区のような遺跡も、数百年に亘って集団が定住したことなど考えられず、移動、断絶の時間を伴いながらしかし何度も反復して拠点的に占地された遺跡と見ることができよう。ここで拠点の、中心的な遺跡とその周辺に点在する多くの遺跡の在り方の違いを、次のように指定しよう。勿論集団の拠点は移動することもあり得るが、ここでの「拠点遺跡」の意味はより総体的に見た時のそれである。

拠点遺跡＝見かけの継続占地…継続的反復占地

周辺遺跡＝一時的占地あるいは断続的反復占地

縄文時代の集団は拠点的な場所を持ちながら、特定の季節、あるいはより長い期間に亘る移動を領域内で繰り返したであろう。それを見る良好な資料がいま眼前にある。

縄文中期末葉 この四街道市北部遺跡群では、縄文中期で加曽利EⅡ期以前の遺構、遺物集

第11表 縄文後晩期における内黒田・千代田・物井遺跡群の動態

	大 割	池 花	池 花 南	千 代 田 Ⅰ 区	千 代 田 Ⅱ 区	千 代 田 Ⅲ 区	千 代 田 Ⅳ 区	八 木 原 貝 塚	千 代 田 Ⅴ 区	御 山	清 水 ・ 新 久	出 口 ・ 鐘 塚
加曽利 E Ⅰ	○	○	○									
加曽利 E Ⅱ	○	○	○							○		○
加曽利 E Ⅲ	○	○	○	◎	◎					○	○	○
加曽利 E Ⅳ						○	◎			○		
称名寺(1)	◎		○				◎				○	
称名寺(2)	○						○					
堀之内(1)			○				◎		○			
堀之内(2)												
加曽利 B 1	○			○		○	○		○	○	◎	○
加曽利 B 2	○	○	◎			○	○		◎	○	○	◎
加曽利 B 3	○	◎					○					
曾 谷		○	◎			○	◎			○		○
安 行 1			○			○	◎			○	○	○
安 行 2							◎		○			
安 行 3 a		○					○		◎			
安 行 3 b							○		○			
前 浦							○		○			
千 網			◎							○		
(+)									○	◎		
荒 海		○	○							◎		
弥生(初期)		○	○							○		
須 和 田		○	◎									○
宮 ノ 台			○									

※報文では詳細が不明のため表記方法を変えた。

中を検出した遺跡はない。縄文中期の遺構を持つ遺跡は千代田Ⅰ区と千代田Ⅱ区で、ともに加曽利 E Ⅲ期と考えられる住居跡が1棟ずつ検出されている。両遺跡は連続する台地上に存在したが、その間の時期差の有無は微妙である。大規模な遺跡の存在は現在のところ認められないが、該期の土器を少量出土する遺跡は非常に多く、広範囲に集団の活動が展開されたことが推測される。

加曽利EⅣ期になると遺物を少量でも出土する遺跡も激減するが、対して千代田Ⅳ区に小竪穴を伴うような集落が形成されている。活動の様態は拠点的、安定的と言い得ようか。

縄文後期前半 称名寺期に至っても千代田Ⅳ区の集落が継続（完全な継続とは言えないように思われる）している。しかし大割遺跡にも住居跡及び遺物集中を伴う短期の居住が認められ、また遺跡全体に称名寺式土器が少しずつまとまりながら分布しており、複数回の占地在想定される。ここで断定は避けたいが、該期は千代田Ⅳ区を概ね拠点としながら、大割遺跡を副次的な活動の場として移動を反復していた可能性が濃厚である。

堀之内期はやはり千代田Ⅳ区で住居跡が検出されているが、必ずしも拠点的、継続的な様相を示さず、また遺跡群全体についても遺構、遺物が稀薄である。おそらく八木原貝塚を含めて未知の、活動拠点としての遺跡が隠れているのであろう。

縄文後期後半 加曽利B期の遺跡は急増する。ただ確実に加曽利B期の住居跡と考えられるものは千代田Ⅴ区の1棟しかない。加曽利B1式土器をまとまって出土する遺跡は物井地区にある。連続する台地上の御山、清水・新久の各遺跡がそれで遺物包含層が複数箇所形成される。それらが継起的なものか、並立したものであるかは検討の余地があるが、いずれにせよ該期の拠点は御山遺跡から清水・新久遺跡にかけての地域であった可能性が高い。

加曽利B2期には先述の千代田Ⅴ区の住居跡以外に池花南遺跡がまとまった遺跡として注目される。遺物包含層の面積や出土遺物量では現在のところ群を抜いていると言ってよい。時期的には加曽利B2期でもB1期の様相を残した古い段階に位置付けられ、御山遺跡などに後続する拠点的な遺跡となるかも知れない。またB2期には他に土坑を伴う出口・鐘塚遺跡や大割遺跡など多くの遺物集中が形成されているが、これは複数拠点が存在したと言うより、住居跡があまり検出されない点から見ても頻繁な移動の結果と考えるほうがよいであろう。

加曽利B3期にはまた遺跡が減少する。池花遺跡でやや分散的ではあるが遺物集中が形成されているが、遺跡群全体としても遺物量は少ない。ただこのころから千代田Ⅳ区が再び拠点化される可能性があり、未検出の遺跡を含めて該期の掌握にはいまだ資料の集積を待たなくてはならない。

曾谷期には八木原貝塚を含めた千代田Ⅳ区が、確実に拠点的な集落として機能していることが、住居跡はともかくとして多数の小竪穴群の存在から推定される。他遺跡では殆ど断片的な資料しか得られていないが、ただ池花南遺跡のみ広範囲に遺物が分布する包含層が検出されている。千代田Ⅳ区との関係は、称名寺期の千代田Ⅳ区と大割遺跡の関係と同様のものか。

安行1期においても千代田Ⅳ区の拠点的性格は些かも揺らがない。遺跡群の中で該期の遺跡はやはり加曽利B期に比べて少ないが、池花南遺跡と御山遺跡～清水・新久遺跡に小規模な遺物集中が残されており、副次的な活動を置いた遺跡がやや分散的になったとすることができるだろうか。

安行2期は千代田Ⅳ区で1棟の住居跡が検出されているだけと言って過言でない。しかし千代田Ⅴ区においても土器の検出は見られ、晩期に入ってしまうと拠点がⅤ区に移動することからその先鞭はここにつけられていると考えることもできる。

縄文晩期前葉～中葉 前述したように晩期に入ると千代田Ⅴ区の優位性が目立ち、安行3a期にはⅤ区に住居跡が残される。その以前、安行2期から安行3a期への過渡段階において池花遺跡に小規模な遺物集中があり、短時の占地が行われている。しかしその後は前浦期まで千代田Ⅴ区と千代田Ⅳ区以外では全く遺物を出土していない。その2遺跡のうち千代田Ⅳ区では遺構は検出されず遺物量も少ないのに対し、千代田Ⅴ区で検出された遺構は安行3a期の住居跡だけであるが、相対的な遺物量は多い。したがって現状では千代田Ⅴ区を主、千代田Ⅳ区を従として移動を反復していたと考えられる。

縄文晩期後葉 千代田Ⅳ区、千代田Ⅴ区は前浦期までで断絶し、それに代わるように出現するのが池花南遺跡である。ここでは千網期（後半）の大規模な遺物集中が見られ、残念ながら住居跡は検出されなかったものの、該期の可能性がある土坑群や祭祀的遺物などから拠点的な居住空間であったのは明らかである。しかし千代田Ⅴ区の前浦式土器とはまだ少しの隔たりがあり、他に未知の遺跡があることも確実である。

浮線文土器に代表される時期を3段階に分けるとすれば、池花南遺跡は概ねその第2段階に相当しようが長期には継続せず、第3段階には御山遺跡が出現する。御山遺跡ではその時期の住居跡などを伴う遺物集中が見られるが、実は前段階にも地点を異にして小規模な遺物集中を形成しており、第3段階の居住域形成前の池花南遺跡からの一時的移動であることも考えられなくはない。この御山遺跡は拠点的な遺跡として荒海期の古段階まで続くが、千代田Ⅴ区でも少量の該期の土器が報告されており、やはりこの時期にも副次的な遺跡をともなう短時の移動が繰り返されていたのであろう。

御山遺跡の終焉の後、池花遺跡に荒海期新段階の包含層が形成されている。しかしこれには遺構はなく、遺物量も少ないし、また短時間で終わってしまい、これに後続する遺跡が不分明になる。

弥生時代 前述のように縄文時代の終末との繋がりがよく解らないが、弥生時代初頭と思われる遺物を出土したのは池花遺跡である。隣接する地点の荒海期の遺物集中との関係については、出土する土器にあまり共通点がないため言及できない。これ以後の遺跡は御山遺跡の少量の資料を除いて池花、池花南遺跡にほぼ限られていく。しかも須和田期の池花南遺跡のみ拠点的な遺跡と認め得るだけで他は小規模な遺物集中を残すだけである。弥生中期の後半になると鹿島川の彼岸には大崎台遺跡を始めとする一大遺跡群が確認されており、此岸でも山梨相ノ谷遺跡などがある。弥生中期前半以前についても、鹿島川沖積地のより近くで遺跡が確認される可能性が残されている。また出口・鐘塚遺跡の古墳周溝内から須和田式土器の破片が出土し

ていることなどから、勿論まだ遺跡群内に未検出の遺跡が存在している可能性も濃厚である。

⑤まとめ

以上当遺跡群における縄文中期末以降の遺跡の「盛衰」を通観した。縄文時代から弥生時代への過渡以降はまだ不明な点が多いが、中期末から晩期末までの集団の動態がある程度明らかになりつつあると言える。ここで通観した結果、遺跡群の在り方に大略次の2つのパターンが指摘できるように思われる。

その第一は、拠点的な遺跡が比較的固定していて、それと少数の周辺遺跡の間を反復移動したと考えられるパターンである。加曽利EⅣ期から称名寺期、あるいは曾谷期から安行1期が典型的と言える。

第二には拠点的な遺跡そのものが移動したと推測させるパターンである。この時には一時的な占地が行われた遺跡も増加している。加曽利B期が典型的である。これを一見すると、遺跡数の増加からあたかも集団の分立があったかのようなのであるが、実際はそうではなく短期の移動が広範に繰り返されたからと考えておきたい。

この2つのパターンの相違には、自然的な生産諸条件を含めて社会的な要因が大きく関与しているであろうことは言うまでもあるまい。しかしその要因の具体的な内容となると簡単には明らかにできまい。それよりもいまできること、そして必要なことは、こういったパターンの推移が他地域でも普遍性を持ち得るか、それとも多様な在り方のうちの一つなのかを明らかにし、そして何よりも個別の遺跡を越えた縄文時代の集団領域の具体像を構築していくことである。今後当地域の調査の進展にしたがって、当遺跡群の動態を個々の遺跡の立地条件等も考慮しながらより詳らかに追及すると同時に、他地域の遺跡群との比較検討を行っていきたい。

千代田遺跡群の文献

- 1 米内邦雄・宮入和博『千代田遺跡～千葉県印旛郡四街道町～』 四街道千代田遺跡調査会 1972
- 2 米内邦雄『千代田遺跡発掘調査概報』 四街道遺跡調査会 1977
- 3 米内邦雄『八木原貝塚調査報告書』 四街道遺跡調査会 1978

物井地区の遺跡群についてはすべてが未報告であるが、今回担当者のご厚意によって御山遺跡、清水遺跡、新久遺跡、出口・鐘塚遺跡の縄文時代の資料を実見することができた。

補記 今後上記のような検討をより精緻に実践していくためには、遺構を伴わず、多量の遺物も出土しない遺跡の軽視を改めなければならない。かかる“目立たぬ”遺跡においても遺物分布の把握、つまり遺物集中の一括性やその単位を把握するべく努めなければならない。さらに言えば、このような遺跡は短い期間で廃絶され、しかも連続的に遺物が重層することがないために、場合によっては非常に良好な一括遺物を得ることが可能であろう。それは継続的な集落遺跡での複数時期の“混在”を排除する操作が不要であるだけでなく、単なる遺構一括遺物よりも、ある時点で集団によって廃棄された遺物群を総括することが可能であるからである。